

染まっつていくのに、目が惹き付けられてしまう。

「：子どもじゃない：か、まあ確かにな」

「玄徳さん：？」

隣に座る細い腰を浚うようにして、膝の上に抱き上げる。

きよとんとした黒目がちの瞳が、玄徳を見下ろしている。その柔らかかそうな頬を愛おしげに撫でると、彼女はうつすらとその頬を染めた。

「子どもはこんな、男を煽るような真似はしないな」

「煽るだなんて、そんな：」

花は心外だと言わんばかりの顔で、眉を寄せた。

大体、自分が贈った衣を身につけて着飾っているだけで充分だと言うのに、それを彼女が一番分かっている。ない。

「知ってるか、花」

「：はい？」

あの時開きすぎていると言つて直して貰つたはずの襟元は、やつぱりいつもの衣よりは開きすぎている気がする。その開いた襟元から覗く肌を、度重なる戦で堅くなつた指先で辿ると、ぴくりと素直な反応が返ってきた。

「男が女に衣を贈る理由つて奴を」

「：え？それは着て欲しいと思うからじゃ：ん、ないんですか？」

いたずらな指先に敏感に反応してか、彼女は胸元を押さえた。

「それもあるが、やはりそれを脱がしてみたいからなんだろうな」

「：え？」

自分の杯に、先程よりも少し多めに入れた媚薬に酒を混ぜて口に含む。甘い様な苦い様な不思議な味のそれを、まだよく分かつてませんと言つた顔をしている彼女に口付けて口腔内に流し込んだ。

「：んんっ？……んん……！」

こくりと喉が動いて嚥下したのを確認すると、奥の方に縮こまつている彼女の舌を絡めて吸い上げた。舌と舌が絡み合うその僅かな水音にも煽られていく様に感じる。

「……はあ」

僅かに唇を離すと、何とも色っぽい吐息が彼女の口から零れた。その表情は、まさしくこちらの欲を煽るものでしかなくて。今までになく艶めいた様子に、思はず喉が鳴つた。それは暫くお預けを食つていた事も加味されるか。